

國學院大學學術情報リポジトリ

日本語聴解・会話クラスの運営とオンライン授業への対応：

台湾の科技大学日本語学科の初級後半クラスを例に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国学院大学日本語教育研究会 公開日: 2025-07-02 キーワード (Ja): 聴解・会話, オンライン, 初級後半, 台湾, 科技大学日本語学科 キーワード (En): 作成者: 神作, 晋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001738

日本語聴解・会話クラスの運営とオンライン授業への対応

—台湾の科技大学日本語学科の初級後半クラスを例に—

神作晋一

【キーワード】聴解・会話 オンライン 初級後半 台湾 科技大学日本語学科

1. はじめに

1.1. 概要

本研究は台湾の科技大学日本語学科における日本語聴解・会話授業の運営と、コース途中で移行したオンライン授業への対応を含めた実践である。

当該の課程は台湾の科技大学日本語学科の大学部の夜間コース2年次の科目【課程】でいわゆる四技能のうち「話す」と「聞く」課程を統合した基礎科目である。

この年（民国109年度、2020年9月～2021年6月）の課程では、二学期の途中（2021年5月～）から、新型コロナウイルスの拡大にともない、大学での授業も通常の教室での運営から、当該の機関は全学でオンライン授業に移行した。回数としては残りの3回と期末テスト（2週分）ではあったが、急遽オンライン（授業）で対応せざるを得なくなった。本来なら、オンラインであることを見越したコースデザインということで始めるべきところである。台湾の教育機関では早々と全面オンライン授業に移行したところもあったが、筆者の所属機関では対面授業を実施・継続しつつ、やむを得ない場合に移行という方針になっていたため、そのようになったのである。

1.2. 科技大学日本語系の日間部・夜間部の比較

ここではまず、科技大学日本語学科の日間部と夜間部（進修部）について、学生の日本語能力や学習状況などについての状況を確認しておきたい。

表1は当該の某科技大学日本語学科の状況を主として学生の日本語レベルや状況にかかわる項目についてまとめたものである。それぞれの項目について述べる。

表1 某科技大學日本語学科の状況

	日間部	進修部(夜間部)
入学時の レディネス	・既習者 7 割／未修者3割 ・既修者 N2～N3	・既習者3割／未修者7割 ・既修者 N3～N5
クラス編成	一定のレベルに編成(3～4クラス) N2以上、N3～N5、未修等に区分	・未修者とそれ以外(2クラス) ・既習者間のレベル差が大きい
困難点・ 悩み	・日本語能力試験N1合格の困難 ・会話能力などの停滞	・自宅学習・授業時間外の学習時間がどのくらい取れるか ・授業時間外のグループ作業は困難 ・クラス外の学生の受け入れ【重補修・副専攻など】

まず、入学時のレディネス（既習者か未修者か）について述べる。いわゆる技職系の高校【高職】を卒業した学生が入学してくるが、日間部の場合は高校の日本語学科出身（日本語を主専攻とする）の学生が7割くらい入ってくる。レベルは（個人差もあるが）概ねN2～N3がボリュームゾーンということになっている。一方、夜間部は入学までの既修者が3割でレベルは（これも個人差があるが）N3～N5というのが既修者のボリュームゾーンである。

次に、クラス編成である。日間部の場合は3～4クラスを分けるときに、プレイスメントテストや日本語能力試験の取得級、また会話授業のための面接などで、既修者も各クラスがある程度一定のレベルになるよう編成が可能となる。一方で夜間部の場合は、クラス編成をする場合、人数の都合で2クラスとなるため、未修者とそれ以外ということになるが、既修者間のレベルに差がある状態での1クラスということになる。上はN1, N2レベルがいたりもするが、学習歴1年でN5レベルぐらいの学生も同じクラスにせざるを得ない。

そして、授業運営や学習上の困難点・悩みも（日間部と夜間部で）違っている。日間部の場合は、0スタートの学生のレベルが思ったほど上がらないということもある。一方、既修者の方では、高校3年間日本語学習の経験があるものの、N3～N2の学生がなかなかN1合格を果たせないということや、会話のレベルが中級で止まってしまう⁽¹⁾ということなどがある。

一方で夜間部の場合は、全く違うレベルの問題がある。多くの場合、昼間仕事をしていて、夜間に大学に登校してくる。仕事や生活に組み込まれた学生生活となるが、物理的に時間がないという学生も多い。そのため、授業時間以外の自宅学習等がどのくらい取れるのなかなか難しいところがある。そのような状況であるので、授業はその時間内だけでできるだけ完結させるような運営や進行をしなくてはいけない。いわゆる宿題というものなかなか難しく、授業時間以外にグループ作業をするのも難しいであろう。ただでさえ学生には（同じ台湾人同士でも）コミュニケーションをとるのが苦手だったり億劫になってしまったりする者がいるのだが、時間の制約がさらにそれらを困難にするのである。

また、夜間部の場合は日間部の課程の「補完」という側面もある。日間部学生の履修科目の不合格による再履修【重修】や2年次以降の編入学生のための未受講科目の履修【補

修】、両者を併せて【重補修】と表記することがある。）副専攻のため科目の受講を希望する場合などの学生の受け入れをするということである。日間部の学生の場合、まずは日間部で受講可能な科目【課程】を受講するのを優先⁽²⁾するのだが、各学年での受講が必須となる科目が時間割上重なるということを確認して、それで夜間部の科目を受講しにくるわけである。そのようなこともあり、一定あるいは均一な習得レベルの受講生による運営が難しいということになる。

こうした中、台湾の科技大学の日本語学科の例では、例えば神作（2010、2014、2015）などの各種の日本語教育の実践報告があるが、それらは日間部で高校時から日本語を主専攻として学習して来ている既修者で N2～N3 を取得しているいわゆる中級のクラスの状況であった。

今回は夜間部の学生で、習得段階がそれより前の初級後半くらいのクラスについて行うことになる。

1.3. オンライン授業について

1.3.1. オンライン授業とは

ここでは、まずオンライン授業について確認しておきたい。「オンライン授業」についてはあちこちで論じられているが、例えば山田・伊藤（2021：7）では、秋山・長瀬（2020）を引き、「対面授業」を「一つの教室に教師と学習者が集まって行う授業」とし、一方「オンライン授業」は「インターネットで講義や教材を配信したり、PC やタブレットなどのインターネットに接続された端末を介して行う授業」としている。

そして、オンライン授業の分類では、A) ライブ講義型（一方向、同期）、B) オンデマンド型（一方向、非同期）、C) Web 会議型（双方向、同期）、D) 課題提出型（一方向、非同期）があり、実際の運用ではこれらを組み合わせたり、応用⁽³⁾したりするものである。

筆者の担当したのは（会話授業でもあることから）、C) Web 会議型（双方向、同期）のものであり、それを実際に行ったということである。

1.3.2. オンライン授業における議論について

オンライン授業については、国内外で多くの論考等がなされている。例えば、オンライン授業についてメリットと課題を明らかにしようとしたのが河内等（2021）である。所属する機関の教師や学習者へのアンケート調査などから、表2のように6つの観点（①出席・試験②教材、③学習活動、④コミュニケーション・距離感、⑤時間・労力・健康、⑥その他）から整理しているが、教師・学生両者が感じたオンライン授業のメリット・デメリットはおおむね一致するという。

台湾でもいくつか出ている。高等教育機関の日本語関係でも、例えば、所属機関でいくつかのハイフレックス型の授業を受けた学生にアンケートや聞き取り結果など整理した今福（2021）、作文のオンライン授業を受講した学生にアンケートを行った本間（2022）、異文化協同学習活動を行った授業での伊藤佳代（2024）などがある。これらは、いずれも学生（受講生）からアンケートからオンライン授業の現状や課題、改善点などを探ったもので

表2 河内他（2021）オンライン授業（Zoom）についての教師や学習者の認識（筆者による抜粋・編集）

	メリット	デメリット
①出席・試験	出席管理が容易、遅刻・欠席大幅減少、グループワークが容易	不正行為を防げない、 <u>a 学生が授業以外のことをしていても把握できない</u> 、他ルームを把握できない
②教材	資料共有が容易	著作権問題、ホワイトボード使いにくい
③学習活動	学習成果が迅速に把握・共有可能 <u>a 学生リラックス・集中、全員が同じ距離、活動スムーズ</u> <u>b 辞書などのオンラインツールが使いやすい</u>	文字指導が困難、文法導入が困難、非言語・待遇表現指導が困難、発表練習しにくい、校外学習・現地調査ができない、 <u>e 授業に集中しにくい</u>
④コミュニケーション・距離感	<u>c 全員の表情が確認しやすい</u>	人数多いと参加者把握できない、 <u>f 学生同士交流困難</u> 、 <u>f 心的距離、カメラオフ</u>
⑤時間・労力・健康	<u>d 時間・労力節約、感染の危険性回避</u>	準備大変、 <u>g 目や体が疲れる</u>
⑥その他	教員・学生のメディアリテラシーの向上	<u>h 不安定な通信環境、デバイスの問題</u>
※下線部は学習者の側にも見られるもの		

ある。どれも課題としては、通信環境の整備、教師のデジタルリテラシーの向上や授業方法の調整、学生自身のデジタルリテラシーや自己管理能力の向上などが挙げられている。オンライン授業でどのようなことが行われたのかという事例が蓄積されているが、今後も引き続き必要である。

今回は、大学の日本語科目の、相互のコミュニケーションを目指した会話課程で、教科内容（教材）の導入と練習、そして、教員と学生あるいは学生同士の音声のやり取りを、オンライン上でもできるようにすることを目指したものである。

2. 当該課程のクラス運営

2.1. 担当クラス（学生・学習歴など）

某科技大学応用日語系の夜間部2年生のクラスで「日語聴講実習（一B）」（109年度1学期、2020年9月～2021年1月）と「日語聴講実習（二B）」（2学期、2021年2月～2021年6月）である。それぞれのクラスの構成は次の通りである。

1学期【29人、男16/女13】 ※うち重補・補修13人（男4女9）

2学期【30人、男16/女14】 ※うち重補・補修13人（男3女10）⁽⁴⁾

どちらも30人くらいのクラスであるが、本来の夜間部2年生という学生は16人と半分を少し超えるくらいであり、その他⁽⁵⁾は日間部の再履修【重修】や転学等による未受講の学生【補修】などであった。

2.2. 習得レベルによるコースのレベル設定

夜間部の当該学年ではクラスは2つとなっている。一つのクラスが入学時0スタートで2年目というクラス（Aクラス）であり、筆者が担当したBクラスは入学時既修者（おおむね非未修者で学習歴1年以上）という条件で構成されている。先に述べた日間部の再履修や補修の学生、他学科の副専攻希望の学生などは学習歴2年以上でN3～N2ぐらいであったが、学習歴1年くらいで、Aの方が良いかというような微妙な場合でも、クラスの人数やまずは所属学科の学生優先ということで、人数の少ない当該のクラスで受け入れたということである。結果、初級後半（JLPT N4レベル）～中級（N2程度）ぐらいの学生での

クラス運営となった。

このようなレベル差もあり、仕事をしながら通うなど勉強時間の確保が難しい学生もいる中、汎用的あるいは最大公約数を目指して、レベル設定を初級の後半（N4 レベル）くらいと設定することにした。

2.3. 主教材など

主教材として『文化初級日本語②③』（2冊、文化外国語専門学校日本語科、大新書局、2014年）を使用した。当該の教科書は文型シラバスと場面シラバス（学校、日常生活）で構成されている。当該の教育機関の慣例でずっと使い続けているものでもあり、万が一、授業の分担の変更（専任だけでなく兼任の教師へという場合も含む）などにも対応（引継ぎなど）できるようにというのも考慮したものである。教室でもPPTを作成していた。オンラインになった時もそれを画面共有などで使用した。

3. 実際の運営

3.1. 実施

表3は当該の課程の概要を一覧にまとめたものである。以下、授業実施、定期テスト【期中・期末考試】、成績評価の順に述べていく。

3.1.1. 出席確認・導入

授業が始まると、入室を確認し、こちらから点呼を取った。それぞれの通信環境やアプリ等が問題なく動いているかの確認でもある。それぞれの教材の単元の導入は次のように行った。1 新出単語のアナウンス（発音）、2 会話例（本文）の聞き取り（音声放送→発音練習）、3 文型等解説、という順番を繰り返した。その際、この授業では科目名に「聴講実習」とあるように、聞く【聴】と話す【講】があるので、音声を聴く時間を意識的に取るように心掛けた。教材の音声は、音声編集ソフト⁽⁶⁾を使用して mp3 形式のファイルを作成、ppt に差し込む形をとって、スライドに表示した会話例や文型等の音声を放送（再生）するようにした。そして、その後に入る練習問題の会話例の練習も同様（音声放送→発音練習）に行った。

3.1.2. ペアで練習・披露

教師による会話例（空所補充などのスキット）を作成して、それを ppt に映して練習をした。練習の際は教師と学生一人ずつということもあったが、できるだけ学生同士（2人 or 3人で一組ずつ）教室の前に出て実演する形式を取った。その他、項目によっては録音課題を設定し、期日を決めて提出という形をとった。

3.2. オンラインでの進行

オンライン授業では会議システムに GoogleMeet (<https://meet.google.com/landing>)

を使用した。当該の機関では GoogleMeet か Microsoft Teams かのどちらかを選ぶようになっていたが、機能は多少制限されるものの、操作等のしやすい方で、他の科目を担当とする同僚も使用するという事で学生への導入等利便性も考慮し選んだ。

進行では前項で述べた導入から教室でのものと同様の項目を画面上で行なった。教室ではペアでの練習の様子が確認できるが、オンライン上ではどうしても1組ずつしかできないし、確認もできない。しかし、それは受け入れることにして、一組ずつ会議システムにある「手を挙げる」機能を使い、実演していった。

表3 担当クラスの1年間の概要

課程名 年・学期		日語聴講実習(一)(B) 2年次1学期 (109年度)2020年9月～2021年.1月	日語聴講実習(二)(B) 2年次2学期 (109年度)2021年2月～2021年6月
授業概要		初級後半(N4)レベルまでの文型表現を用いての聴解・会話練習	
使用教材		『改訂版 文化初級日本語②③』文化外国語専門学校 大新書局 2014年 その他補助プリントなど	
具体的な 項目・内容	前半	10団体旅行 11自己紹介 12簡単！日本料理クラス	17アルバイト <u>18ドライブに行きませんか</u>
	後半	13インタビュー 14サラさんの日記 15どちらのほうが高いですか 16病院	19迷子 <u>20もう進路を決めましたか</u> <u>21ホームステイ</u> <u>※13,14, 15週目 5/17,24,31</u> <u>(オンラインON-LINE)</u>
テスト形式・課題	期中	口頭試験 8-9週目 「自己紹介(出身地、家族、趣味、将来等)について話す」+質疑応答	口頭試験 8-9週目 「①誘う、②断る、③普段の習慣・経験等について話す」+質疑応答
	期末	口頭試験 17-18週目 「インタビュー(何かのテーマで自分から教員に質問・回答する)」 ※事前にテーマを提出、実施、事後に報告書提出	口頭試験(オンラインON-LINE)16・18週目 「①最近の様子について、②夏休みの予定を話す・聞く、③将来のことについて話す・質問する」 ※17週目は祝日(端午節)のため休講
評価方法	期中	評価ポイントを作成(4段階、タスク+言語能力をルーブリックで表示)	評価ポイントを作成(4段階、タスク+言語能力をルーブリックで表示)
	期末	インタビュー(1テーマ提出、2実施、3報告書)項目ごとに採点 評価ポイントを作成(4段階、タスク+言語能力をルーブリックで表示) ※それぞれ評価基準をルーブリック等で作成し事前に公開 ※実施後には個人成績表を作成→配付	評価ポイントを作成(4段階、タスク+言語能力をルーブリックで表示)
その他		自己紹介(録音ファイル【檔案】提出) 日記の朗読(録音ファイル【檔案】提出)	オンラインでの連絡には大学の教育支援システムやLINEグループを使用

3.3. 期中・期末テスト(オンラインを含む)

それぞれの定期テストでは、授業で実施した文型や場面から発話が可能な課題や採点基準を設定し、表4のようなルーブリックを作成した。それぞれの回のテストの項目について

ては表3に記載した通りである。

1学期は、期中が自己紹介と質疑応答、期末がインタビュータスク（事前テーマ提出、

表4 2年次2学期期末テストのルーブリック

課題1	↓項目\得点率→	95%	80%	50%	30%以下
1-1	最初のあいさつ ×1	敬語を使って丁寧にあいさつできる。	ですますを使ってあいさつできる。	挨拶はするが、文末などが不正確。	何も話せない、応えられない。
1-2	最近のこと ×1	最近のことについて、内容を詳しく述べることができる。	最近のことについて、簡潔に述べることができる。	最近のことについて、上手く述べられず、聞き手が理解できない。	何も言えない。
1-3	夏休みの予定、将来のことなど ×4	夏休みの予定、将来のことについて、内容を詳しく述べることができる。	夏休みの予定、将来のことについて、簡潔に述べることができる。	夏休みの予定、将来のことについて、上手く述べられず、聞き手が理解できない。	何も言えない。
1-4	相手(試験官、教員)に聞くことができる。 ×3	1-2,1-3について、自身のことを答えるだけでなく、相手にも詳しく(連続して)聞くことができる。	1-2,1-3について、自身のことを答えるだけでなく、相手にも聞くことができる。	1-2,1-3について、自身のことを答えるだけで、相手にはあまり聞くことができない。	全く質問することができない。
1-5	終わりのあいさつ ×1	自分自身から申し出て、敬語を使って丁寧にあいさつできる。	自分自身から申し出て、ですますを使ってあいさつできる。	挨拶はするが、文末などが不正確。	何も話せない、応えられない。
1-6	正確さ(文法・語彙) ×1	ほとんど誤りがない。	誤りもあるが、会話の進行には支障がない。	文法や語彙が不正確で、一部会話で不明なところがある。	文法や語彙が不正確なところが多く、会話の内容があまり理解できない。
1-7	流暢度(アクセント・イントネーションなど) ×1	母語話者と同じくらいの流暢度。	偶に止まることはあるが、会話の進行には支障がすくない。	よく止まることはあるが、なんとか会話を進めることができる。	よく止まってしまい、沈黙してしまう。
1-8	会話方略(ストラテジー) ×1	会話の中で自然に「もう一度」聞いたり、分からない言葉を確認したり、相手の話に反応できている。	時々「もう一度」や分からない言葉を確認したり、相手の話に反応できている。	繰り返し聞いたり、分からない言葉を確認できたりせず、自身で会話を進めることはできない。	繰り返し聞いたり、分からない言葉を確認できたりせず、止まってしまふ。

実施、事後に報告書を提出) というものであった。

また、特に2学期のテストについては、受講生には会話開始の(私からの)発話をすべて同じものにすると予告しておいた。そこからどのくらい話することができるかということにした。2学期の期末テストではオンラインだったが、同様に行なった。

①最近の様子について(「最近どうですか?」という発問からスタート)

②夏休みの予定を話す・聞く(「夏休みは何をしますか」という発問からスタート)

③将来のことについて話す・質問する(「大学を卒業したらどうしますか」という発問からスタート)

オンラインのテストでは、同じ会議システム(GoogleMeet)を使用し、「LINE」のグルー

ブを併用して入室のタイミング⁽⁷⁾を知らせることにして、順次行った。

3.4. 評価と実際の成績

前述のループリックを用い、どんなレベルの学生も最低限の発話ができれば80%、それ以上にできた学生にはさらなる上積み(95%)ができるものとした。実際の成績については、表5のように、当初予測したほどばらつきがなく、90～70点に収まっている。さらに受講生から(試験官である教師に)質問できることも評価に入れたが、実際には忘れたのか気後れしたのか、そこまではできない学生が多かった。オンラインでも同様であった。

表5 期末テストの成績

	1-1	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	合計
平均	82.67	84.17	85.50	70.83	83.67	80.50	83.17	81.33	80.92
最大値	90	90	90	90	90	85	90	90	90
最小値	75	75	75	50	80	70	70	70	70

3.5. 学生のアンケート

この回では、筆者自身、独自のアンケートなどを作る余裕がなかったため、所属機関が成績開示のタイミングで行なっている学生アンケート【教學反応調査】の結果を参考までに示すことにする。30人の受講性のうち、20人からの回答があった。点数としては5点満点で4.33が平均となっている⁽⁸⁾。急遽オンラインに移行した授業であったものの、おおむね満足してもらえたのではないかと考えられる。

表6 学生アンケート N=20

	平均	強く同意		同意		中立		不同意		強く不同意	
(01)生徒に新しいアイデアを生み出すよう促す。	4.25	9	45%	7	35%	4	20%	0	0%	0	0%
(02)生徒の学習状況に応じて指導内容と進捗を調整する。	4.40	10	50%	8	40%	2	10%	0	0%	0	0%
(03)教師は生徒の反省に対して建設的な対応をする。	4.35	10	50%	7	35%	3	15%	0	0%	0	0%
(04)興味深い活動で生徒を授業に参加させる。	4.30	9	45%	8	40%	3	15%	0	0%	0	0%
(05)授業中、授業のテーマに対して明らかに熱心で真剣である。	4.35	10	50%	7	35%	3	15%	0	0%	0	0%

※原文は英語(筆者による日本語訳)

4.33

3.6. 個人成績表

受講生には図1のようにフィードバックとして個人成績表で項目ごとの点数と所見等を記載して配付した。教室で顔を合わせる期中テスト後は紙に印刷して配付した。1学期のインタビュータスクでは、報告書を大学の教育システムに送信した際の返信としてPDFで、

2 学期のオンラインのテストでは、後日 PDF を学生の大学のメールアドレスに送信した。

図 1 個人成績表の例

109-02B 日語聴講実習 (二) (B)
20210707~

期末考試 (口試) 個人成績・評価表

學號: [REDACTED]

姓名: [REDACTED]

[REDACTED]

- 1-1 最初のあいさつ ×1
- 1-2 最近のこと ×1
- 1-3 夏休みの予定、将来のことなど ×4
- 1-4 相手(試験官、教員)に聞くことができる ×3
- 1-5 終わりのあいさつ ×1
- 1-6 正確さ(文法・語彙) ×1
- 1-7 流暢度(アクセント・イントネーションなど) ×1
- 1-8 会話方略(ストラテジー) ×1

項目	課題 1	計 100%	評価	換算
得点率	76.1	77	B+	78
満点	100	100		
平均	81.96	82.4		82.4

※点数の合計 は 学期の点数 ではありません。
学期の点数は、得点調整などを経て決定されたものが知らされています。

課題 最近のこと、夏休みの予定・将来の希望、相手に質問

項目	1-1	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6	1-7	1-8	合計
得点率	80	85	85	50	80	80	85	80	1065
満点	100	100	100	100	100	100	100	100	1300
平均	82.66	84.17	85.5	70.83	83.67	80.5	83.17	81.33	1147

〈話題・キーワード〉

遠隔、昼夜逆転、アルバイト、レストラン、旅行(台中、景色、ペットレストラン)

〈コメント〉

ご自分のことは大体よく話せましたが、こちらへの質問がありませんでした。どんなことでも相手に話を促す(質問など)をするというのがあれば、本当の意味での会話になります。

4. まとめと今後の課題

以上、本研究では台湾の科技大学日本語学科の初級後半レベルの聴解・会話課程における授業・口述テスト等の運営について、オンラインへの対応を含めて述べてきた。

高校3年間で日本語を学習し初級を終えた(N3 レベル)や成員が皆0 初級などのように

ある程度同じレベルになっているクラスの運営とはまた違って、レベル差がありながら、初級後半レベルからの対応となるクラスの運営をしてきた。これは、昨今の台湾の高校での日本語学習の状況や、台湾の（科技大学）日本語学科における学生募集状況なども影響している、大学での様々な学習背景を持つ学生が集まるクラスの運営の事例として位置づけられると考える。

オンライン授業についていえば、教室であれば、各自がそれぞれのペアで同時進行的に練習を行えるが、オンライン上では一組ずつ行うことになるので、若干非効率ではあった。しかし、最初は一人ずつしか発話の実演が行えなかったものの、慣れてくれば、受講生同士がタイミングを合わせて上手く会話の練習・実演ができるようになっていた。

口述テストもオンライン上で互いにストレスなく上手く進行した。こうした会話や聴解の課程や口述テストは、オンライン環境でも十分実施が可能であることを気づかせてくれる事例でもあった。

しかし、教室（対面授業）、オンライン授業にかかわらず、多くの課題もある。

一つは、汎用的な対応にならざるを得ないレベル設定は適切か、どのあたりを基準にするかということである。いつまでも初級に合せていればレベルは上がらないし、単純に次年度（の課程）に先送りしているだけになってしまう。ある程度この段階というのを（多少無理にでも）引き上げていくようなレベル設定が必要になってくる。現状では教材の設定は易しくして、個別に練習する課題やタスクを（その力量に合わせて）課すというくらいの対応になる。

もう一つは練習内容（発話量、回数）を充実させられるかということである。30人くらいの受講生となると、発話量や回数をどう確保するかが問題となってくる。オンラインになった場合もどうするか。授業時にできない場合は録音課題などを設定して定期的にやってもらおうというようなこともある。

また、オンライン授業については、筆者の所属機関の方針もあって、平時のオンライン授業は実施されていない。前述した先行研究などで指摘されている諸問題があり、教員や学生の個人レベルでは対応や解決ができない問題も含まれており、難しいものもある。

それでも、運営の工夫・教師のかかわり方など、今後何がいいのか、優先順位もあろうし、何もかも叶えることは難しい面がある。時代の流れや状況も変わる中⁽⁹⁾で過去の事例やその時点でのリソースなどを活用しながら、模索し続けることになる。

注

- (1) 中級ぐらいであれば、ある程度ネイティブの教師（日本人）や一般の日本人とのコミュニケーションが最低限であっても取れてしまうため、それ以上の上達のコモチベーションが上がらないということもあるが、これは筆者の関わっている学習者だけでなく、多くのケースであることである。
- (2) 夜間部開講科目の場合、本来の学生の習得レベルから、難易度を低く設定せざるを得ないため、日間部の学生にとっては楽勝となる科目になってしまうことから、時間割の確認はしっかりと行う（それでもごねる学生はいるが…）ことになる。

(3)その他に、次のようなものがある。

ハイフレックス型：同じ内容の授業が対面授業と同時双方向型のオンライン授業で、学生が自身の状況に応じて選択できるもの。

ブレンド型：各回の授業の目的に合わせ、対面が望ましい回は対面、それ以外はオンラインで実施するなど、対面とオンラインを組み合わせで授業を行うもの。

分散型：学生を学籍番号の奇数・偶数などで分け、半分の学生は対面、残りの学生はオンラインで授業を受け、次の回では学生を入れ替えるという方法で授業を行うもの。

(4)結果的に1学期も2学期のクラスも同じ学生が概ね重なっていた。

(5)夜間部のクラスは本来のクラスの学生のためのクラスである他、(日間部を含めた)単位取得のための「セーフティネット safety-net」という側面もある。学生の中には学修状況や家庭の事情などで日間部から夜間部に転学する者もあり、またその逆もある。

(6) WavePad 音声編集ソフト (<https://www.nch.com.au/wavepad/jp/index.html>)

(7)カンニングペーパー(手控え)の存在があったり、事前に会議システムに入っていて他の人のテストを聞いていれば後の人が有利、のようなことの心配もあるが、これまでのケース(例えば、後に続く学生が先に済んだ学生にヒアリングをするなど)を考慮しても、会話の場合、実際に自身が会話でより良いパフォーマンスを発揮できるかどうかはまた別の問題であるとみなしたので、あまり問題視はしなかった。

(8)アンケートの文言が、システムの都合で英語になっていたようで、十分に吟味していなかった学生もいるようだった。

(9)この当時は、2年次の聴解・会話科目を日本人教員が担当(3年次には聴解科目を台湾人教師、会話科目を日本人教師が担当)ということになっていたが、カリキュラム編成の変更により、現在では、1.2年次の聴解・会話科目を台湾人教師、3年時の会話科目を日本人教師が担当ということになっている。また、昨今の学生募集状況から、クラス数も一つしか編成できないことにもなり、受講生の習得レベルなども変わってくることがあるので、さらなる対応が必要になる。

参考文献

秋山貴俊・長瀬拓也編(2020)『ゼロから学べるオンライン学習』(石井英真監修) 明治図書出版

伊藤佳代(2024)「台日文化通識クラスにおける対面とオンラインのハイブリッド型異文化協同学習の実践研究:日本語能力向上の観点から」『台湾日本語教育學報』42 2024年6月 pp1-30

今福宏次(2021)「ハイフレックス型オンライン授業の課題と改善点—受講生に対するインタビュー調査結果—」『銘傳日本語教育』24, 2021-10 pp81-110

河内彩香・村田晶子・長谷川由香・竹山直子・池田幸弘(2021)教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか—ZoomとGoogle Classroomを併用した日本語教育—『多文化社会と言語教育』1 2021年3月 pp30-45

神作晋一(2010)「プレゼンテーションの練習を目的とした日本語表現授業の実践研究—台湾の

- 大学における日本語中級クラスの例―」國學院大學日本語教育研究』1 國學院大學日本語教育研究会 2010. 3 pp2-23
- 神作晋一 (2014)「科技大學の既習者クラスにおける会話課程の実践―N3 レベルスタートのクラスを例に―」2014 年台湾日語教育學會 J-GAP TAIWAN 第 24 回例會 Can-do 教育實踐發表會&外語口說評量教學研究工作坊, 臺灣・台中市 2014. 6. 21 pp38-46
- 神作晋一 (2015)「科技大學の既習者クラスにおける会話課程の実践―発表プレゼンテーションの活動を例に―」台湾日語教育學會 J-GAP TAIWAN 『Can-do 実践研究国際シンポジウム J-GAP のこれから―台湾、韓国、日本の発足・推進・今後』― 2015. 03. 07 pp72-79
- 神作晋一 (2017)「台湾の科技大學日本語既習クラスにおける会話課程の実践― J F can-do を導入したコースデザイン―」『國學院大學日本語教育研究』8 國學院大學日本語教育研究会 2017 年 3 月 pp8-23
- 国際交流基金 (2010a)「JF 日本語教育スタンダード 2010 [第二版]」
- 国際交流基金 (2010b)「JF 日本語教育スタンダード利用者ガイドブック [第二版]」
- 本間美穂 (2022) 台湾の大学におけるオンライン日本語授業の現状と課題―アンケート調査資料と作文資料の分析から―《台灣日語教育學報》39 號 (2022/12) pp. 88-117
- 山田智久・伊藤秀明 (2021)『オンライン授業を考える 日本語教師のための ICT リテラシー』くろしお出版

―台湾・南臺科技大學助理教授―